

巻頭言 就任の御挨拶

腫瘍内科学教室 教授
藤 阪 保 仁



2022年10月1日に本学医学部に腫瘍内科学教室が新たに設置され、教授を拝命しております藤阪保仁でございます。当教室は、「がん」としての共通性に基づいて、先端的・集学的ながん薬物療法を臓器横断的に実践できるリサーチ・マインドを持った腫瘍内科医を育成すべく進んで参りたいと考えております。2023年度には、大学院生が2名入学し、今春も新たな大学院生を迎える予定です。診療と同時に研究においても少しずつではありますが教室の形を整えて参ります。がんに係る臓器横断的・職種横断的な知識と経験・情報が結集しうる場として、がん診療のコンシェルジュとしての役割も果たし、諸先生方、スタッフの皆さんと協働し、患者さん、地域医療機関から信頼される腫瘍内科学教室を築いて参ります。

何とぞ、ご指導ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、2023年は「がん診療」や「がんに係る高度専門医療人育成」に関する今後の進むべき方向性に関して2つの大きな施策が発表されました。厚生労働省からは「第4期がん対策推進基本計画」、これと人材育成の面で連携する形で文部科学省からは「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」が発表されました。

「第4期がん対策推進基本計画」では、全体目標を「誰一人取り残さないがん対策を推進し、全ての国民とがんの克服を目指す。」とし、全体目標の下に、「がん予防」、「がん医療」及び「がんとの共生」に関する分野別目標を定め、これらの3本柱を支える基盤整備の一つとして、「人材育成の強化」を推進するとしています。さらに、従来のがんゲノム医療によるPrecision Medicine（精密医療:個別化がん医療）やライフステージに応じた医療環境の整備に加え、遠隔医療やAI診断、腫瘍循環器などの新たながん関連学際領域との連携、患者参画など、これからのがん医療の在り方の方向性が示されています。私達も三島医療圏のがん診療連携拠点病院、がんゲノム医療連携病院としての機能の向上に尽力していく所存です。

「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」（第4期がんプロ）が、第4期がん対策推進基本計画の人材育成の強化として取り組むべき施策とされています。地域格差に加え急速ながん医療の高度化に伴い、医療現場で顕在化した課題やがん予防の推進、新たな治療法の開発等の課題が浮上

してきたことから、がん医療の新たなニーズや急速ながん医療の高度化に対応できる医療人養成を促進する必要があります。これら諸課題に対応するために本学は、京都大学を主管校とする三重大学、滋賀医科大学、京都薬科大学で連携する5大学のコンソーシアムに参画し、がん専門医療人の育成を進めて参りたいと思います。

私に取り組んで参りました領域の1つに、「がん関連学際領域」との連携の推進があります。がん薬物療法・集学的治療の着実な進歩により、長期生存の希求が可能となってきました。同時にチーム医療の推進・再構築が求められ、次世代のがんプロフェッショナル養成プランでは、がん関連学際領域にも精通したがん専門医療人の養成を目標として掲げています。これにより、早期からのがん関連学際領域との診療連携が可能となり、がん患者が必要な治療や支援を総合的に受けられるようになると考えられます。「誰一人取り残さないがん対策を推進し、全ての国民とがんの克服を目指す」ということは、たとえ、がんになっても健康を希求できることに他なりません。

しかし考えておきたいことは、がん医療の高度化に伴い、医療現場で顕在化した課題や、新たなニーズが出現しなければ、外圧がなければ、がん関連学際領域との連携は果たして進まなかったのか、私達は自ら問うてみる必要があると思います。がん患者や他領域との連携を困難とする障壁を、医療者自らが生み出してはいなかっただろうか、「誰一人取り残さない」という言葉の本質は、格差を認識しその解消に努め、健康を希求できる社会とは何か、その本質を我々が問い続けることこそが重要だと思います。この本質を問い続けることこそが、がん関連学際領域との連携に意味を持たせ、持続可能で発展的な取り組みを可能とするのではないかと考えています。

最後になりますが、先日、名古屋にて開催されました第21回日本臨床腫瘍学会にて理事に選出いただき、各種ガイドラインをまとめるガイドライン委員会委員長を拝命致しました。本邦の臨床腫瘍学における大阪医科薬科大学のリーダーシップをしっかりと示して参りたいと思います。腫瘍内科学教室はまだ誕生間もない教室ですが、患者さんや先生方、学生の皆さんなどの期待に応えるべく全力を尽くして参ります。今後とも、なにとぞよろしくお願ひ申し上げます。



左から大学院生 船本智哉先生、満屋 奨先生